

# 平成 30 年度 第 1 回 取掛西貝塚調査検討委員会議事録

[日 時] 平成 30 年 6 月 4 日（月曜日） 午後 3 時 00 分 開始

[場 所] 船橋市役所 本庁舎 7 階 705 会議室

[出席者] 委員：阿部芳郎委員長、堀越正行委員、谷口康浩委員、佐々木由香委員

（欠席：樋泉岳二副委員長）

オブザーバー：木原高弘千葉県教育庁文化財課埋蔵文化財班長、永塚俊司千葉県教育庁文化財課主任上席文化財主事・大内千年千葉県教育庁文化財課主任上席文化財主事

事務局：道上主幹（文化課長補佐）、石坂埋蔵文化財調査事務所長、栗原郷土資料館長補佐、白井埋蔵文化財保護係長、白崎主任主事、早坂主事、畑山飛ノ台史跡公園博物館非常勤学芸員

[委嘱状交付] 道上主幹（文化課長補佐）

[委員長選出] 道上主幹（文化課長補佐）

[副委員長選出] 道上主幹（文化課長補佐）

[挨拶] 道上主幹（文化課長補佐）

事務局： 議事の進行に先立ち、各委員、オブザーバーより一言ご挨拶をお願いします。

オブザーバー： 文化庁から当初は早期の範囲を中心に国史跡を目指すということを聞いています。指定スケジュールは計画より前倒しをするくらいスピード感をもって進めてほしい。

佐々木 委員： 取掛西貝塚は現状で遺跡が非常によく残されています。古い時期の貝塚が船橋市で発見されたのは驚きです。全国屈指の情報量と情報の濃さを持っています。

阿 部 委員長： 遺跡の保存・活用を進めるには、学術的な調査・研究の成果を広く一般の人たちに認識してもらうことが重要です。市民の理解を得て国の史跡にできればよいと思います。

阿 部 委員長： それでは、議事の進行に移ります。

はじめに、船橋市情報公開条例第 26 条の規定により、船橋市の設置する附属機関の会議は原則公開とされていることから、傍聴人の受付をしましたところ、本日の傍聴人の希望はなかったことをご報告いたします。なお、本日、樋泉副委員長は欠席となっております。

それでは、「平成 29 年度取掛西貝塚保存事業の報告について」事務局より報告をお願いします。

事務局： 平成 29 年度取掛西貝塚保存事業について報告いたします。取掛西貝塚は全体で約 7 万 6 千㎡あり、そのうち第 1 次から第 5 次まで本調査を実施しています。宅地の道路部分において本調査を実施し、1 万年前の動物儀礼跡と貝塚を伴う集落跡が見つっています。その西側は畑の状態で残っており、面積は約 5 万 5 千㎡あります。

平成 29 年度は、そのうち東半分においてトレンチを 11 本設定し、6 月から 9 月に確認調査を実施しました。

縄文時代早期の遺構としては、おおよそ 17 軒を検出しました。このうち 10 トレンチでは、花輪台式期の竪穴住居跡が検出されています。これまで取掛西貝塚では、縄文時代早期の遺物としては、花輪台式土器よりも若干新しい、東山式土器、平坂式

土器、大浦山式土器、天矢場式土器が主体でしたが、初めて花輪台式期の竪穴住居跡が検出されました。また、同じく 10 トレンチでは井草式土器を伴う遺構が検出されました。

縄文時代前期の遺構としては、竪穴住居跡を 3 軒検出しました。ほかに古墳時代終末期ごろの竪穴住居跡を 1 軒検出しています。

平成 29 年度の調査では、全体に縄文時代早期の遺構が広がっていたことがわかりました。縄文時代前期の遺構は、ある程度西に偏って分布している状況です。

確認調査に関連する事業として、芝山西小学校の 6 年生による発掘体験事業を実施したほか、8 月には市民代表による遺跡見学会、9 月には地権者を対象とした遺跡見学会を実施しました。また、調査時には大学生 28 名の参加がありました。

調査に関する広報については、新聞紙に 6 回の記事掲載があったほか、テレビでのニュース報道が 2 回ありました。

また、開発の相談があった土地について、保存のために市の史跡に指定し、土地を購入しました。

このほか、取掛西貝塚に関する講演会・講座を実施しました。飛ノ台史跡公園博物館と共催で実施した縄文大学および考古学講座では、阿部委員長、樋泉副委員長、堀越委員のほか、明治大学の藤山龍造准教授、長野県北相木村の藤森英二学芸員、千葉市埋蔵文化財センターの西野雅人所長に講義いただき、多数の参加者を得ています。

また、5 月、10 月には内部検討会として、確認調査内容の事前検討等を実施しました。その後、12 月には自然環境調査のため、ボーリング調査の候補地検討のため、日本大学の遠藤邦彦名誉教授にご参加いただきながら、現地踏査を実施しました。平成 29 年度取掛西貝塚保存事業の報告については以上です。

阿 部 委員長： ありがとうございます。質疑については後ほどまとめて実施することとして、2 点目の議事、「平成 30 年度取掛西貝塚保存事業の計画について」事務局より説明をお願いします。

事 務 局： 平成 30 年度取掛西貝塚保存事業の計画について説明いたします。大きく 8 点の事業予定があります。

1 点目として、平成 30 年度は、引き続き確認調査の実施を予定しています。畑となっている範囲の、西半分を調査対象としています。

この範囲を含め、平成 28 年度に分布調査を実施しており、土器や貝の散布状況を確認しています。その際に、貝層らしきものが確認された位置を考慮して、トレンチの配置を予定しています。今回、台地の西半分に縄文時代早期の遺構がどのように広がっているか、また縄文時代前期の遺構がどういう風に展開していくのか、台地の北部にどのような遺構が出てくるのかを調査していきたいと思います。

2 点目として、自然環境調査のためのボーリング調査およびその分析を予定しています。調査地点としては、候補地を 3 か所選定しています。今後、候補地の地権者の方と交渉を予定しています。

3 点目として、取掛西貝塚における 3D 地形測量を、ドローンによる航空レーザー測量にて実施いたします。併せて確認調査において、遺構等のオルソ画像測量を予定しています。

4 点目として、調査検討委員会の開催を予定しています。

5 点目として、調査対象地の地権者関連として、平成 30 年度確認調査範囲の地権者の方に許可をいただき、農地一時転用を申請し、許可後に調査開始の予定でいます。調査前に地権者の方全員を訪問し、調査全体の計画を説明いたします。

6 点目として、S 地点の土地・建物について取得を予定しています。この地点については不動産売買の相談があり、土地と建物の両方取得する予定です。

7 点目は、普及事業として、取掛西貝塚のパンフレットを発行予定です。A4 版のフルカラー4 ページから 6 ページくらいの、親しみやすい内容を考えています。また、概要報告書の原稿を今年度作成、平成 31 年 4 月に印刷製本し、平成 31 年度の日本考古学協会で配布する予定です。

講座・講演会・遺跡見学会としては、平成 30 年度は子ども達や教員の方への広報にも力を入れたいと考えており、教員及び市民対象の講座を予定しています。

芝山西小学校の発掘体験については、引き続き実施予定です。また、広報活動について、文化庁から助言をいただきましたので、新聞報道について引き続き注力していきます。

8 点目として、専門職の配置と体制ですが、平成 27 年度から平成 28 年度にかけて、考古専門職 7 名から 14 名に増員を図っております。平成 30 年度は新規採用が 1 名おり、埋蔵文化財調査事務所に配置しています。また、飛ノ台史跡公園博物館に非常勤学芸員を 1 名配置しています。6 月に採用試験を実施して、さらに考古専門職を採用する予定です。

事業推進のイメージとしては、まずは開発から遺跡を守る、保存のための国史跡指定を目指す段階として、平成 29 年度から平成 31 年度、あるいは平成 32 年度くらいまでを考えています。

具体的な事業内容としては、3 か年での確認調査の実施と、4 か年目に総括報告書の作成を考えています。平成 32 年度に総括報告書を作成し、12 月に刊行をして、1 月に国史跡への指定について意見具申し、平成 33 年度に答申をいただけると、最短の計画となります。遺跡の保存については、東側から開発が迫っている取掛西貝塚ですが、そのようなかたちで保存が図れば、大変ありがたいと考えています。

平成 30 年度取掛西貝塚保存事業の計画については以上です。

阿 部 委員長： ありがとうございます。ただいまの報告について委員の先生方、ご質問があればお願いします。

阿 部 委員長： まず、議論の起点として、遺跡の本質的な価値を共有化することが必要と思います。

この遺跡の特質を示す部分として、①縄文時代早期前葉の集落遺跡が大規模に発見されたこと、②ヤマトシジミを主体とした縄文時代早期の貝層が形成されていること、③縄文時代早期の動物祭祀の跡が検出されていること、④多量の貝製品及び未成品が検出されていること、⑤東関東を中心とした土器群に、三浦半島の大浦山式土器がかなり大量に出土していること、⑥それに加えて縄文時代前期の住居と貝塚も一部 検出されていること、が挙げられます。

当初は縄文時代早期の貝塚と集落というかたちで、取掛西貝塚の意義というのが主張されていましたが、縄文海進の最大のピーク時に近い時期の貝塚と集落も同じ場所

に重複して存在しており、縄文時代早期から前期まで時期を拡張して、遺跡の重要性を主張できるのではないかと思います。

谷口委員： 縄文時代早期の部分に限って言えば、撚糸文土器期の貝塚遺跡は、まだ 10 に満たない程度の少数しかない中で、動物遺存体が豊富に出土しており、当時の狩猟、漁撈の内容が具体的に語れる点で充分に国の史跡としての価値は説明できると思います。

しかし、縄文時代前期の遺跡としてこの遺跡だけが持っているかなり特別な価値となると、説明がかなり難しいのではないのでしょうか。どういう方針で臨んでいくかが基本的な課題となるだろうと思います。

阿部委員長： 将来的な活用を考えたときに、この遺跡だけで活用と言ってしまうのか、あるいは船橋市全域の文化財の保存活用の活性を目指したかたちの核にするのか、という視点で考えた場合に、この遺跡は縄文時代早期と前期は、何が違うのかという事を一般の人に広く見せるのに格好の場所になると思います。将来的にトータルで活用する視点に立った時に、やはりこの縄文時代前期の部分を無視できない。ここに意味を求められないでしょうか。

谷口委員： それは一つの良い考え方だと思います。まだどれくらいの遺構が、どれくらいの密度で残っているのか、遺跡の時期などもまだよく分からないので、そういう点を調べた上で、議論していく必要があります。

佐々木委員： 縄文時代前期に、縄文時代らしい植物利用が成立したと言われていますが、縄文時代早期と前期で古環境と植物資源利用も語れる遺跡は、まだほとんどありません。この遺跡の調査で低地部のボーリング調査を行って古環境の情報を押えた上で、台地上の遺跡でどういう資源管理や資源利用をしたのか明らかにできれば、縄文時代早期から前期の資源利用を解明できると思います。これは、取掛西貝塚の価値の一つになるのではないのでしょうか。

谷口委員： 堅穴住居跡内の貝塚以外に、斜面部に貝塚が形成されているかどうか、なるべく早い段階で見当を付けた方が良いと思います。

事務局： 3年後に、補足調査を考えています。かつて南部を土取りした断面に、貝層が一部見えたという話があり、現在はわかりませんが、今後、留意しないといけないと思っています。

堀越委員： 南側の谷の川底に貝層が見えており、縄文海進時の自然貝層である可能性があります。遺跡のすぐ傍に、実は海があった可能性もあるので、遺跡がある台地の上だけでなく、ここも少し調査してみるのも良いのではないのでしょうか。

事務局： この付近で、ボーリング調査を入れる計画を立てているところです。

阿部委員長： 縄文時代早期前半に、市内では取掛西貝塚以外に貝層がある遺跡はないですね。

事務局： ありません。縄文時代早期後半の条痕文土器期になると増えてきます。

佐々木委員： 縄文時代早期・前期のムラのイメージがより具体的になるように、湧水地や水場の調査も考えていただけると良いと思います。

阿部委員長： 遺跡の本質的な価値として、縄文時代早期から前期までを含む貝塚・集落であることを、まず今日ここで、基本的な認識としたいと思います。

これに関わる部分で、平成 30 年度の調査計画について説明がありましたが、さらに遺跡の本質的な価値を高めるために、こういった調査、調査の方法が必要になって

くるか、ご意見いただけますでしょうか。

谷口委員： 撚糸文土器期の堅穴住居跡はかなり構造にバラツキがあります。集落としての評価をする場合、しっかりしたはつきりと住居といえるものがどれで、それ以外のものがどうなるのかということをはつきりさせないと、堅穴が何十棟あったという事だけだと、本当にそれが集落なのかという部分が依然として弱い。これは縄文時代早期の撚糸文土器期の集落研究に限った事ではなく一般的な問題でもあるが、特に縄文時代早期の部分については、堅穴の評価が、まだ、きちんとできていない。堅穴の存在をつき止めて、それを地図上に落としていくだけでは弱いと思います。確認した堅穴はある程度、掘るのでしょうか。

事務局： すべてではありませんが、できる限りサブトレンチをいれています。

阿部委員長： 掘らないで保存する部分と、掘る部分と、どのように選んでやって行くのかというのは、一つの課題となりますね。

谷口委員： これまでの発掘調査でも掘り込みが深くて、大掛かりな花輪台貝塚みたいなタイプの住居跡と、すぐ近くには非常に掘り込みの浅い、貝層が入っている住居跡があったので、二種類はたぶんあると思います。調査をすれば、構造が分かるかと思います。武蔵台遺跡の場合は、計画的な堅穴の配置があり、その部分の住居跡は灰床炉のついた、きちんとした住居跡が多いです。それ以外のタイプの住居跡もあります。また、陥し穴状の土坑など、居住以外の遺構も配置されています。

阿部委員長： このような複数の遺構が集落を構成するという事例に、取掛西貝塚になるのかどうかですね。

谷口委員： 縄文時代早期を前半・後半とする区分は少し大雑把過ぎるのではないかと思います。縄文時代早期は実年代で4,000年以上あり、環境変動が急速に進行している時期です。だから、他地域との比較や古環境との対応関係を考える場合、もう少し細かい区分で考えた方がよいと思います。自分の場合は縄文時代早期前葉、中葉、後葉、場合によっては末葉という風に分けています。

佐々木委員： より高精度で古環境と土器編年について対比する場合、まず、実年代が土器付着炭化物とどのように対応しているのか、その整理が必要だと思います。

事務局： 小林謙一先生が行った年代測定は、灰床炉中の炭化物と貝層中の炭化物です。確実に土器の時期を示す土器付着炭化物の分析はまだ行っていないですが、今後そういう事例が出てくれば、ぜひ、年代測定をやっていききたいと思います。

堀越委員： 住居なのかそうでないのか、遺構の性格と時期をある程度確認する必要があると思います。できるだけサブトレンチをいれて、試料を採取し、正確な年代を把握したほうがよいのではないのでしょうか。

オブザーバー： 史跡整備に関わる、保存目的の調査では、以前はできるだけ掘らないように指摘があったのですが、近年は文化庁も、遺構の性格や時期を分かるように掘るよう指導しています。

阿部委員長： それでは、3点目の議事、「今後の委員会の運営について」事務局より説明をお願いします。

事務局： 平成30年度の調査検討委員会のスケジュールですが、本日を第1回としまして、第2回につきましては、調査現場の視察をしていただきたいと考えており、だいたい

8月の上旬ごろを想定しております。

第3回につきましては、9月末に調査が終わり、今年度の確認調査の成果とまとめということで、11月前半くらいに、事務局から報告のうえでご意見をいただきたいと考えております。

第4回につきましては、2月ごろに行い、次年度どのように調査を実施したら良いか、ご意見をいただきたいと考えております。また、3月17日には調査成果の報告会について開催を予定しております。スケジュールについては以上です。

阿 部 委員長： ありがとうございます。今後の検討の進め方について、提案なのですが、取掛西貝塚調査検討委員会設置要綱第7条の規定に基づき、委員会の下部組織として作業部会を設定したいと考えております。

最近の研究は、かなり枝分かれしておりまして、ここにお集まりいただいた委員の先生方だけでは、なかなかそうした分析・研究が十分に進められない側面もありますので、3つの作業部会、ワーキンググループを設けさせていただき、そこで具体的な調査・分析を推進していければと考えております。

1つ目は、私が担当させていただきたいと思いますが、この時期の土器について検討する作業部会、2つ目は、貝塚の研究をする作業部会を、樋泉副委員長を中心に、3つ目は、古環境や植生等を分析検討する作業部会を、佐々木委員を中心にと考えております。

さらに、堀越委員には、県内の貝塚の研究史の中における取掛西貝塚の意義づけ、谷口委員には、早期文化における取掛西貝塚の意義づけを広い視野からご指導いただきたいと思っています。

各 委 員： 異議なし。

阿 部 委員長： ほかに何かございますか。

事 務 局： 全体計画の枠組み、コンセプトについて先ほど説明しておりませんでした。取掛西貝塚を一つの遺跡としてだけ捉えて保存・活用するのではなくて、船橋市全体として、例えば「海と船橋」をテーマに、多面的な活用空間として取掛西貝塚を考えていきたいと考えております。歴史や考古学にとどまらず、市民の方への成果還元として、もっと広げていきたいと考えています。

阿 部 委員長： その一つの拠り所として、取掛西貝塚の発掘調査、そしてその成果の活用といったものを考えていければと思います。委員の先生方も積極的なご協力をお願いいたします。それでは、以上をもちまして、平成30年度 第1回取掛西貝塚調査検討委員会を閉会いたします。